

## 悲報に接して

日本エネルギー法研究所所長  
財団法人土地総合研究所理事  
成田 頼明

4月16日に、石原舜介先生が突然に逝去されたとの報に接し、しばらくの間は我が耳を疑う呆然自失の状態であった。御病気で入院されているというような説は全く伝わってこなかったので、私にとっては、本当に突然の悲報であった。やがて事態が呑み込めるととも、先生の御生前の温顔が目には浮かび、長い間おつき合いさせて戴いた過去の記憶の糸を手繰りながら、あのときはああだった、こうだったと、いろいろの思い出が次々と胸裏に去来し、改めて立派な先生に先立たれた悲しみがこみ上げてくるのである。

私は、石原先生とほぼ同じジェネレーションに属することから、戦時中から戦後初期に係る時代を共有してきたのであるが、先生にはじめてお会いしたのは、たしか、昭30年代末期ごろで、建設省の主催する研究会の席上であったと記憶している。当時は、私も若くて張り切っていた助教授時代であり、石原先生も、東工大で都市工学という新しい学問分野の開拓に情熱を燃やされていた新進気鋭の研究者であった。先生の御芳名は、その前から、法律学専攻という専門違いの門外漢であった私もよく承知していたが、同席の研究会などを重ねる度に、先生の社会・経済・法制度等に関する該博な知見に驚き、敬服の感は深まる一方であった。私も、そのときどきの課題に対して、行政法を専攻する立場からいろいろ意見を述べると、きわめて寛容にお聞き戴き、大局的な見地に立って、バランスよく纏めて下さった御手腕にいつも感心していた。私も、このような先生のお捌きに学ぶところが多く、そのときに学ばせて戴いたことがらが、いまでも大変役立っていることを卒直に認めなければならない。

私は、自分の固有の研究領域との関係で、都市工学等の自然科学系の学者や専門家との付き合いが多く、同業の法学分野の先輩・同輩・後輩より以上に親しくしている方々も多いが、先生は、その中でも、きわめて多くの知識や考え方のヒントを豊富に教示戴ける第一級の知己であった。人を引きつけないではおかない人格的魅力、戦中世代として一本強い筋が通った信念、そして太っ腹な包容力、これらの先生の人となりも、その大きな誘因であったといえよう。このようにして、先生とはいつも気が合い、先生もまた私のことを認めて下さったのか、ことあるごとにお引き立てを戴いた。

石原先生は、かねてから、我が国で不動産学が等閑視され、国民経済的な見地からきわめて重要な役割を担うべき不動産業が悪いイメージでのみとらえられがちであったことに対して危機感をもたれていた。しかし、先生は、そのことを単に嘆くだけではなく、独特の信念と行動力により、自ら起って、不動産学の学問としての確立、不動産教育の推進、不動産業のイメージ・アップのために、敢然として実践行動に移られたのである。不動産学会の創立、大学における不動産学部の新設等がその成果であり、土地総合研究所の創設も、その延長線上にある先生の御努力の賜物というべきであろう。不動産学会の創設にあたっては、私も及ばずながら微力を致し、発足後は、会長である先生を補佐する副会長の指名を賜ったが、創設段階における先生の超人的な関係官庁、経済界等との折衝・資金集め、会員の拡大等の御活躍は、誠に目をみはるものがあった。夜遅くまで、丸ビルの会議室に集って、学会のあり方等について議論したことを懐しく思い出しているところである。

石原先生が、超人的努力で創設された不動産学会も、今日では、多数の会員を擁する大学会に成長し、学術会議から正規に認知された学術団体としての学会になった。そうして豊富な学際的研究が掲載されたレベルの高い学会誌も定期的に刊行されている。

不動産学会も、不動産企業も、バブル経済が崩壊し、「土地神話」が崩れるとともに、全く新しい問題に直面することになった。学会の研究課題も、不動産企業の方向性も、これまでとは全く違ったものとならざるを得ないが、戦後半世紀間も続いた異常な状態が本来の姿に戻ったいまこそ、冷静に新しい不動産学や不動産企業の21世紀におけるあり方を検討する好機ということもできるように思われる。

こうした大きな時代の変わり目に先生が逝去されたことは、誠に惜しみても余りあることであるが、残された我々は、先生の御遺志を継いで、残された課題に真剣に取り組まなければならない。そのことこそが、先生への最上の御供養になると思うのである。いまは、ひたすら先生の御冥福をお祈りして合掌するのみである。